



TITLE:

Requiescas in pace!

AUTHOR(S):

平松, 幸三

CITATION:

平松, 幸三. Requiescas in pace!. 西洋古典論集 2001, 別冊: 106-106

ISSUE DATE:

2001-01-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/68706>

RIGHT:

Requiescas in pace!

平松 幸三

京都「国際学生の家」の夕食会に運営委員長として招かれた時のこと、前に座った女性の見事なOxbridge English につい立ち入った質問をしたところ「I am from Munich.」。驚くと「ドイツ人だが、Oxford に3年ほど住んだからでしょう。専門は言語学で、今ラテン語の辞書編纂の仕事をしている。1か月の予定で京大に来ているのは、面識がなかったけれど岡先生のいらっしゃる大学で過ごしたかったから。」とおっしゃいます。理由を聞いて震えました。「ドイツの大学教授でもあれほどのドイツ語を書く人はめったにいません。そんな方に会ってみたくて。」後日京大会館で「PAX」と題する講演をされたコイデルさんでした。

岡先生とは、同級生の誼で中務君を訪れて松平先生の研究室にお邪魔したとき、たまに御尊顔を拝することがあった程度で、先生の学殖・人格・識見の高さを中務君から聞くばかりでした。岡先生の御警咳に接したのは一度だけ、今の勤め先にある生活美学研究所で御講演をお願いした時のことです。同研究所は年間テーマを決めて運営していますが、ある年「面」をテーマにしたことがあって岡先生にギリシアの「面」についてお教えいただくということになり、多田道太郎所長（当時）のご指示のもと事前に御講演の内容を伺うため大阪でお目にかかったことがあります。その時はまだ講演の日から1ヶ月あまり前だったのですが、先生はすでに講演原稿をタイプしておられました。こんな大学者が、あるいは大学者だからこそかもしれません、完全な原稿を用意されるとは。おそれ多くて身が縮んだものです。ご講演当日までさらに推敲を重ねられたのは申すまでもありますまい。そのときの講演論文は『古代ギリシアの「面」』と題して武庫川女子大学生活美学研究所紀要5号に掲載されました。先生の論文を掲載させていただいたことは研究所の誇りとなっています。

こんな程度にしか存じ上げなかった私でさえ、訃報に大きな衝撃を受けたのですから、近しい方々の悲嘆はいかばかりかと拝察申し上げます。私が工学部衛生工学教室に勤務していたころ、ときに先生が土木系教室の中庭を歩いて文学部の方に歩いておられたお姿をお見受けしましたが、今こうしていてもありありと思い出します。心より先生の御冥福をお祈り申し上げます。